

エンディコットと赤い十字（ホーソン）

一六三四年、英國王チャールズ一世はニューイングランド植民地の清教徒總督に書状を送り、國王の敕命による新總督の就任と、英國教會の戒律の受容とを命じた。周知の如く、一六二〇年、プロテスタント最過激派たる清教徒からなる巡禮始祖は英國教會のカトリックの性格に反撥して、信仰の自由を求め新大陸に渡つたが、爾來、彼等は自治に基く植民地建設に必死に取組んでゐたのだから、國王の命令は二つながら到底受容られるものではなく、時の植民地民兵隊長ジョン・エンディコットは憤激の餘り同胞にかう訴へた。

諸君が肥沃な緑の大地や先祖の眠る墓地を捨て、獸の吠える荒野にやつて來たのは何の爲か。「市民としての権利」と「良心に従つて神を崇める自由」とを享受する爲ではなかつたか。然るに國王は己が意の儘になる新總督を吾々に強制し、國教會の偶像崇拜主義を強要しようとしてをり、この儘では何れ此の地で「カトリック教の坊主どもがミサをあげる」事にもな

りかねない。そんな忌^{いま}はしい事を許せようか、劍も抜かず、銃も撃たず、説教壇の階段を血で染めもせず？ 斷じて否だ！

エンディコットはさう叫ぶや、英國旗を飾るイギリスの守護聖人聖ジョージの赤い十字を引きちぎる。聽衆は歡呼の聲を擧げてアメリカの「歴史上最も勇敢な行爲の一つに贊意を表した」。かかるエンディコットの行爲の裡に、彼の死から一世紀後に「我らの父祖が成し遂げたあの解放の戦ひの最初の兆」が認められるのである、さう作品は結ばれてゐる。

「解放の戦ひ」とは、無論、米國獨立戰爭の事だが、自らもニューヨークランドに生を享けたホーソンの、史實に材を採つたこの作品には、アメリカをアメリカたらしめてゐるエートスが如實に示されてゐる。彼は「白髮の戦士」なる作品に於ても、「軍の指揮官と聖者が一體となつた堂々たる人物」、「大義のために戦ふ老いたる戦士」を獨立戰爭前夜のボストンに登場させてゐるが、それら「ニューヨークランド精神」の體現者たる英雄達をホーソンは稱讚して已まなかつた。

然るにそのホーソンが彼の時代の「解放の戦ひ」たる南北戰爭に際しては、ニューヨークランドの奴隸解放論者から袋叩きの目に遭ふ。奴隸制の南部を一方的に非難する北部の獨善的正

義感を嘲弄する一文を公けにしたからだ。だが、「人間は如何なる點に於ても天使に似てゐない」と確信してゐる者があたとすれば、それはナサニエル・ホーソンだつた」とアメリカのある學者は書いたが、ホーソンにしてみれば、他人を道義的に非難し得る資格など本來誰にもありはしなかつた。

「エンディコットと赤い十字」にもさういふホーソンは生きてゐる。彼によれば、清教徒社會では殘酷な刑罰が珍しくなく、教會の傍には笞刑臺や足枷臺や晒臺が置かれてゐたし、耳をそぎ落されたり罪名の頭文字の焼印を頬に捺されたりしてゐる人々も少くなかつた。だが、しかく「犯罪の證據」が目立つからとて、清教徒の時代が今よりも墮落してゐたなどと思つては困る、とホーソンは云ふ。「心の奥底に秘めた罪であらうと、誰彼の區別なく探り出し、白日の下に晒して恥辱を與へる」のが先祖の流儀だつたが、同じ流儀を十九世紀アメリカに適用したら、昔に「勝るとも劣らない辛辣なスケッチの材料」が見出せるに相違ないからだといふのである。詰り、人間が「天使に似てゐない」のは何時の世にも變らない、といふ譯だが、人間性に關するさういふ徹底したペシミズムも「ニューイングランド精神」ならではのものであり、ホーソンは「解放の戦ひ」の英雄精神を稱讚する一方、その美名に酔つて人間性の現實を忘卻

する事の決してない作家であつた。

(ナサニエル・ホーソン短篇集二、南雲堂、國重純二譯)